

ルール解説

ルールの理解は勝利への一歩だ！

試合運営委員会から選手の皆さんへ

第五回テーマ 「このパート、なにをするの？」 第二反駁編

遠い昔、私たちも皆さんと同じ現役プレイヤーで、敗れて涙したあの日の記憶は、今も胸に鮮明に刻まれています。卒業して審判・スタッフをやりながら、あの時これが理解できていれば……と思う事は少なくありません。そんな私たちだからこそ、今の選手に知って欲しい事があります。そんなテクニクや、理解されていないかも？と思えるルールについての解説を、試合運営委員会より連載としてお届けします。

さて第五回は、第二反駁でやってほしいことを解説します。「第二反駁って、何をしたいかわからない」「反論するだけじゃなく議論のまとめをして言われても……」そういうことでお悩みの方、必見です。

◆再反駁だけじゃだめだ！

ディベート甲子園では、勝敗をメリットとデメリットの大きさを比較して決定するという「メリット・デメリット比較方式」を採用しています。肯定側はメリットがデメリットより大きいと論証しなければなりませんし、否定側ならその逆を証明します。

そのため、反駁パートの役割について、ルールは次のように定めています。

ルール本則第2条3項

反駁は、主に、メリット(あるいはデメリット)に対する反論、反論に対する再反論、メリットとデメリットの大きさの比較を行います。

つまり、反駁は相手の議論に反論するだけでなく、メリットとデメリットの比較という仕事も担います。そのためには、お互いに主張をぶつけ合っているだけでは足りません。例えば、メリットが「アフリカの子供1000人を救える」という決着をし、デメリットの議論では「日本の老人1万人の生活水準が大きく低下する」となるとします。この場合、日本政府がどちらを優先すべきかは、一概には言えません。

もしこの二つの議論が平行線のまま試合が終了してしまうと、審判の各々が想定する一般常識を基準に判断されてしまいます。ジャッジ任せは運任せと言われることがあるように、どちらが良いのかわからない状態にすることは、非常に危険なのです。

◆皆で考えた判断基準を、審判に提示しよう

まず注意してほしいのは、単に「メリットはありません。デメリットは発生しません。だから肯定側の勝ちです」と述べても、勝敗には全くといっていいほど影響がないということです。きちんと考えて作ったメリット・デメリットが全く発生しないと判断されるほどの反駁を受けることは極めて稀ですし、仮にこの第二反駁の言とおりの状況なら、第二反駁では何も言わなくても肯定側の勝ちです。

比較をするには、どのような基準で議論を判断すべきかをまず考える必要があります。先ほどの例でい

ば、肯定側からは例えば「単なる生活水準の問題よりも、直接人命にかかわる問題を優先すべき」「先進国である日本は、自国民の負担であつても途上国の子供たちを救う道徳的義務がある」というような観点を出すことで、メリットの方が大きいと主張できます。一方、否定側なら「日本政府の政策なのだから、日本人の生活を第一に考えるべきだ」などがあるでしょう。

これらのような判断基準は、一概にどれがいいとは言えません。また、その場の勢いで簡単に素晴らしいものが思いつくものでもありませんし、よい判断基準を思いついてもなかなか伝わりづらいこともありま

す。チーム全員で意見を出し合い、試合を重ねながら検討してみましょう。そして、判断基準は可能な限り立論から出すべきです。立論の時点で十分に根拠をもって判断基準を示されると、違う基準で比較するべきだという主張は難しくなります。一方で、判断基準についての十分な説明を第二反駁だけでやることも時間も足りなくな

次回予告に代えて

二これまでの五回で、連載第一部を終了させていただきました。第二部では、もう少し戦略的な部分にまで踏み込んで、どうすればより勝率の高いディベートができるかを解説していく予定です。第二部の掲載が始まるまで、しばらくお待ちください。